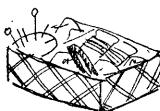


保育の中の小さなこと大切なこと⑧

——
し
か
る
”
と
い
う
こ
と

守永英子



九月号に、"しかる"というごとにについて書いたが、再び
"しかる"ということについて書きたいと思う。というと、
私の保育の中でも"しかる"ということが重要な位置を占めて

得るからである。といつても、幼児との生活の中で、しからなければならないことや、私自身怒りを感じることが全くないわけではない。

したふうであるか否は、自分にはあらず子どもをしかる。ことがないと思つてゐる。多くの保育者が恐らくそうであるようだに、私のクラスの子どもたちも、「先生はやさしい」と母親に言つてくれているようである。それは、時に世間で誤解されることがあるように、子どもを甘やかしてゐるためにしからないのではなく、望ましくない行動をした結果を、しかつて改めさせることよりも、望ましい行動をするようにしむけることが、初めから保育の中核と考えられてゐるからである。そしてまた「しかる」ということが、大人の側の理由如何に關係なく、保育の基礎として欠くことのできない、保育

何か小さなものをしていくつも作っていたT夫は、まだその仕事続けていた。「おかたづけだよ」と近づいたU男は、T夫の作ったものに目をとめて「なに？　へび？」と手にとった。「変なの」「どれ、みせて」とS男が引っぱつた。やりとりしている二人の間で、へびはちぎれた。それから二人は、おもしろそうにへびをちぎり始めた。

何は關係なく 保育の基礎として 矢くことのできない 保育者と子どもとの間の信頼関係が育つことを妨げることがあります

去年から在園していて、気持ちのままにあるまえるU男た

ち。入園して間もない、まだ緊張のはぐれないT夫。自分が作ったへびがちぎられるのを、何も言えずに見ているT夫の

気持ちが、痛いほど伝わってくるのを感じて、私は怒りが込み上げてきた。片づけの手を止めて子どもたちを見つめ、一息のみこんで「Uちゃん！」ととがめた。「一生懸命作った

ものをこわされたら、あなただつていやでしよう？」

私の声に救われたかのように見上げたT夫の顔に、自分がされたことへの（と思われる）不快さがあふれ出た。私の声のきびしさのためか、あるいは調子づいた気持ちから我に帰つたためか、U男たちはしゅんとして、素直にうなずいた。

「Tちゃんが折角作ったのにね」と声をかけながら、ちぎれたへびをセロテープで直しかけたが、その時には私にもU男の立場を思いやる心のゆとりが戻っていた。

「Tちゃんに、これでいいかどうか聞きながら直してあげてね」と、U男に直しかけたへびを渡すと、U男は「ごめんね」とあやまり、一生懸命直し始めた。T夫の表情は次第に治まり、U男が「できた。これでいい？」とT夫に見せ、「Tちゃん、これでよかつた？」と私が声をかけた時は、T夫は素直にうなずいた。ほつとして、ふと気がつくと、M男

がいつもの笑顔で私を見上げていて、「先生って、強いんだね」と感嘆したように言った。

J男が石で窓ガラスを割った時と違い、何故こんなに怒りを感じたのか。恐らく、U男たちの行動によって傷ついたものが「物」でなく、『人間の心』であつたからに違いない。

怒りをそのままとがめるという形で表現したのは、U男と私の間には一年間育くんだけ関係があつたからである。その関係は絶えず注意深く育て続けなければならないが。

私は、きびしくとがめた後、彼が償える道を示し、償つた彼を受け入れた。私のとった方法が充分であるかどうかは分からぬ。しかし、この小さな出来事の中に、保育者として、T夫の傷ついた心をいやすこと、U男を自分を否定されたような不安におとし入れることなく、その行動を改めることを受け入れるようにしむけること、T夫とU男の気持ちが互いにこれ以上マイナスにならないように、できればプラスに転じさせたいこと、私が筋を通すことを目的とするのでなく、この出来事の中で、保育者も含めて人ととの関係を育てたいこと、などのさまざまな思いや願いをこめたのである。